

有森信二

口中に溢れてきた唾を吐き捨てた。唾の滴の一筋が、顎のあたりに絡みついたので、手の平で拭った。

胸が爆発しそうだ。

健治はズックを羽根車同様に回転させ、草叢を跳ぶ。左足が草叢の地面に着地した瞬間に、右足が次の着地体勢に入る。左足が地面に着いている時間を、コンマ一秒でも短くする。そうやって跳ぶ。

草叢には、蝮が潜んでいる。くるぶしまで草丈の伸びた村道には、昼間でも蝮や青大将がとぐるを巻いているのをよく見掛ける。彼らの毒々しい体の斑点や、獐猛な目に出食わすと、健治の血は瞬間に凍り付いてしまう。

青大将は凶体は大きいが、こちらの気配を察知すれば、やおらとぐるを解き、畦の方に消えてくれたりするのでまだました。が、蝮の奴はゆつくり姿勢を変えたかと思うと、いきなり威嚇の牙を向けてくる。尻尾でも踏み付けようものなら、おしまいだ。

もう夜中の十二時を回っており、懐中電灯もないので、細い月の明かりだけが頼りだ。意を決して、走り出した。

草叢を跳ぶ。懸命に両足を回転させ、空中を掻く。

県道に出るまでの百メートルが、どこまで駆けても終わりのない距離に思えた。心臓が破裂しそうに苦しい。草の尖った葉先や鋭い葉脈が肌を刺し、踝を切り付けた。

県道に出た。越えて来た草叢の向こうに、裸電球の下で焼酎を飲み始めた父や伯父たちがいる。ウオツと、ざわめきが伝わってきたので、炭坑節の好きな父が箸で皿を叩きながら唸り始めたのに違いない。

県道の砂利道に立つと、見下ろした位置に、裸電球の光が小さく瞬いて見える。健治も父も伯父たちも、夜明けから畑に出て収穫した葉煙草を、一枚一枚繩に通し、それが済むと、夜を徹して伯父宅の乾燥場に吊り込んだ。

吊り込み作業が終わったのが十一時半を過ぎ、炉の薪に火が点いたのはちょうど十二時だった。乾燥場の柱時計が、ひしゃげたバケツを叩く音色で時を打ち出したので、伯父が「ありや、とうとう明日になつちもうた」としやがれ声を張り上げた。

火が点くと、焼酎になる。これからの、五日五晩の火の安全と、清めと、乾燥葉の首尾よい仕上がりを願うため、焼酎での打ち上げになる。健治たち子供にもコップ一杯のサイダーがふるまわれる。男たちの打ち上げは一升瓶を空にするまで終わらないが、子供たちはサイダー一杯でお開きになる。女たちは、年寄りや家畜の世話のため、八時に

は引き上げている。

十二時を過ぎた夜更けに、朝方まで飲み続ける父を待つというわけにはいかないので、一人で夜道を帰らなければならぬ。

ひもじさなど、とうに通り返している。大きくくねり伸びる県道のほの白い砂利の上に立つと、ようやく治まってきた鼓動が、また高鳴り始める。ここまで来ると蝮の心配はないが、途中五百メートルの県道の周囲には人家がない。その間の県道は、空を隠すほどの雑木が覆い被さり、トンネル状になっている。とっかかりに墓地があり、稲荷社の小さな鳥居があるのだが、一番苦手なのは、トンネルを潜り抜けて最初のカーブを曲がった先の崖下を通るときだ。

崖の中途に、と言っても県道から十メートルと入っていないところに、瓦が一か所だけ落ちかけた一軒家がある。県道から歩み入る玄関に続く道には、セイタカアワダチソウやカヤが繁り、屋根から軒からびっしり蔦や葛が覆っている。

源さん屋敷と村人が呼んでいるこの家は、島一番の腕前と言われた大工の棟梁の源さんが住んでいたところで、八年前の朝、訪ねてきた農協の職員に、居間で血を流して死んでいるところを発見されて以来、一軒家には、誰も手を

触れる者がない。

一か所落ちかけた瓦は、三年前の風速四十五メートルの台風でやられたもので、このとき、村の殆どの家の瓦は屋根もろとも吹き飛ばされたというのに、源さん屋敷の瓦は一か所ずれ落ちかけただけで済んだという。

源さんが何の原因で死んだのか、誰も知らない。村人の噂でも、「仏の源さんのことだ。絶対怨みを買うようなことだねえ。物盗りにしちや、仏壇の引き出しの金には手をつけてもねえし、腹巻きの財布も無事だったという。警察も合点がいかんちゅうで、行きずりの者の仕業じゃないかと、ありとあらゆる調べをやつたらしいが、いまだに何の手掛かりもつかめん。鍵を掛ける家もない村で、こんな大事件が起きるとはなあ。おそらく、死んだ婆さんが、寂しさに一人息子を迎えに来たんじゃろ」というのが落ちで、要領を得ない。

健治も、源さんのことを微かに覚えている。

今健治が寝起きしている離れの改築のときに、源さんの膝に抱かれた記憶がある。膝に抱かれ、頭を太い指で撫でられながら、

「お前は賢そうな頭の格好をしとる。どうじゃ、今からおいの子にならんか。そうしたら、毎日白い飯を食わせ、高等学校でん、大学でん出してやるがな」

と言うものだから、嘘じやろと答えると、

「嘘なもんか、おいは以前からお前を見込んでる。ええか、一步島を出てみる。街には、高校生や大学生が闊歩しとるぞ。若いネエちゃんも、わんさとおる。街の賑やかさには、目が飛び出るほどびつくりする。どうだ、おいは子供がおらんから、来んか。ときに、咲さんよ、あんたんとこは四人もおるから、一人ぐらい養子にくれてもよからう。おいは、咲さんの襦袢まで替えてやったんぞ。従妹でさえなきやな、本当においの嫁に来てほしかつたんやが」と二十以上も歳の離れた母に向かい、声をはり上げた。

小学校に上がる前だった。後先のことでは覚えていないが、焼酎臭い息が頭のとっぺんから何度も降ってきたことを、奇妙にはつきり覚えている。

「健治、行儀が悪かじやないね」

養子にくれ、という話が出たとき、母は一瞬とまどいの色を見せたが、すぐに元の表情に戻ると、源さんの膝の中に沈み込んでいる健治を叱った。

「叱るな、ええじゃないか。ほんま、健治はおいの子だったとしても不思議じゃなかとにね。ウハハ、済まん済まん。若いときは外で派手に遊んだもんじゃが、おいも数えの五十よ。この歳になると、おいが死んだ後には誰もおらんのかと、ときどき考えるようになった。奇妙なもんよ。婆さんが生きるときは、家が絶えるなんざ、てんで思い

もせんかつたに」

「死んだ後やなんて、縁起でもない」

母が源さんの言葉を遮ると、

「この頃よう夢を見る。こう、秋風がカラカラ舞いよる。ふうつと後ろを振り返つてみる。すると、何も無い。何にもないのよ、おいの後ろには。ほんま、咲さんが従妹やなかつたらなあ」

「少し、悪酔いしたらんね」

「悪酔いなんぞするか。素面同然よ」

母は、「悪い冗談、言うもんでない」と背を向けた。

もちろん、健治はここの詳細は知らない。このあたりの謎めいたことを、今でも母がときどき持ち出すものだから、かつてのその場のやりとりが目の前で交わされているかの如くに、頭に焼き付いてしまっている。

「生まれてきたんを、今更腹に戻すわけにもいかんだろ」

母がときどき痲癩まかせに、奇妙なことを健治に向けて口走ることがある。健治が口答えなどするときだ。

源さんが居間で血を流して倒れているのが発見されたのは、母とのやりとりから二月と経たない朝だったという。

その日は農協の支所の棟上げの日で、農協長を始め、村長、駐在、小中学校長まで招待しての祝賀会が催されることになっており、源さんの弟子たち十数人が明け方から準備

備万端整えているのに、いつも真先に現場に出て来る源さんがいつまで経っても現れないので、総務係長と女子係員が源さんを迎えに出向いたのだった。

鍵の掛かっている玄關を開け、源さんの名を呼んでも応えがないものだから、女子係員が居間に足を踏み入れたところ、血の海の中に源さんが俯せに倒れていたという。

村始まつて以来の大事件発生、と警察は各戸に何度も聞き込みに来たらしいが、事件につながる糸口は見付からなかった。源さんに怨みをもつ者などいなかったし、棟梁としての腕も確かで、客や同僚や弟子とのトラブルもない。

最初、腹部の傷からの出血が致命傷になったと思われるが、胃からかなりの吐血をしていたことが分かった。腹部の傷は、吐血で倒れるときに、たまたま道具箱の外にあった研ぎ澄ました鑿の切っ先が、自分の腹部を貫いたのではないかということになったらしい。

それ以来、訪ねる者もなく、源さんが腕の限りを尽くして建てた豪壮な家は、雑草に埋もれ、葛蔓に絡まれ、いつか古城の風格を備えてきた。

しかし、源さんの死因が死因だけに、「人の声を聞いたぞ。誰かがののしり合つてる。助けてくれ」という悲鳴が上がり、断末魔の声がした」

「電灯が点いとる。おかしいな、人がいる筈はないのにと

立ち止まっていると、トントトンと金槌を打つ音がする。

こんな夜中に、なんぞ修理でもしとるのかと思うたが、待てよ、源さんは八年前に死んだ筈だと思い返し、薄気味が悪うなつて、もう全速力で走つたわ」

「なにしろ、源さん自慢の家だったからな。柱も床も天井も、材料を仕入れに木曾だか飛騨だかに、何度となく足を運んだという。坪庭一つにしろ、京都中の寺を歩いて目を養い、石も選びに選び抜いたとか言うてたな。その強い思いが残つとるのよ」

などと、噂が絶えない。

健治は墓地と稲荷社の傍を抜け、うねり伸びる五百メートルの県道を抜け、源さん屋敷の横を一人で突っ切らねばならない。たつた今、蝮の潜む草叢を過ぎて来たばかりなのに、夜中の十二時を過ぎて、うっそうと雑木の被さる道を通らねばならないのだ。

健治は、弟の亘のことを思った。亘は、葉煙草の手伝いを免れ、日曜日だというのに学校に行った。夏休み前の学校は、中体連の県大会の練習で忙しい。本番を間近に控え、朝一番からボールが見えなくなるまで泥にまみれる。

亘はサッカーのフオワードとして、学校一の得点能力を備えている。地区大会で、他校を寄せ付けずに優勝し、県大会へと駒を進めることが出来たのは、まだ一年生だとは

いえ、亘の素早い身体能力があつてのことだったと評価が高い。畑に向かう健治が作業着に袖を通してると、亘は既にユニフォームの短パンに着替え、庭で慣らしのドリブルをしていた。

亘は調子がいい。いつだって、クラブの練習だ、練習試合だと言ひ、殆ど田や畑に出ることがない。健治たちが夜中に仕事を終えて帰つて来ると、先に夕飯を食ひ、さつさと離れの納屋に行き、軒をかいてゐる。

亘ほどの足があつたらと思ひ、もう奴は二時間も前に寝ているのだと考へ、いまましい氣になつた。

何で自分は、こんな夜中に、一人で県道の雑木のトンネルを潜らねばならないのか。草叢を跳んだときは違ふ胸苦しさが襲つてくる。墓地、鳥居。くねりながら五百メートルも続く砂利道。そこを抜けると、源さん屋敷だ。

脈が速くなる。尻の穴から、ズンと突き上げてくるものがある。右手が思はず、股間を押さえる。手のうちに、ギョツと縮こまつたものがある。留美子のことを考へると、いつも大ききを増し、先端部分がヒリつくほどに痛くなるのに、今は三分の一にも満たない。縮こまつたそれを右手で思ひ切り抓り上げ、椎の葉がザツと鳴つた拍子に、息を止め、走り出した。

草叢のときと同様に、とにかく早く早く羽根車を回す。

墓地にかかる。砂利道がぼおつと白い。対象的に、椎やヤマモモに覆われた墓地のあたりが黒く静まつてゐる。

氣味が悪いほどの静けさだ。健治の足音の外には音がない。もし立ち止まつたら、蟻の這う音だつて聞こえるかもしれない。暗がりには何者かが潜んでいて、健治の襟首を捕まえる瞬間を、今か今かと待ち構えているのではないか。健治は首を竦め、両耳を塞ぎ、もつれそうになる足を懸命に回転させ、駆けた。

何とか墓地を過ぎたと思つたとき、健治の胸から、腹から、首筋から冷たい汗が吹き出してきた。いっぺんに速度を緩めてはいけぬのだが、次の関門が構えている。少しだけ歩幅を狭め、汗を手のひらで拭ひ取り、息を整える。

鳥居のところ、父は狐か狸に化かされたことがあるという。伯父の家から近道をして鳥居の下まで来たとき、小さな蠟燭の火が灯り、女が佇んでいるのに出会つた。酔つていた父は、金縛りにあい、女の手招きする方について行き、目覚めたところは鳥居のあたりから小一時間も歩いた磯辺だつたという。

母が「そんな言い訳するんじゃないわ」と突つばねたが、「嘘じゃない。ええか、健治たちも鳥居のあたりを通るときは、油断をするんじゃないぞ。下手をすると、海に引きずり込まれるかもしれん」と真顔で言つた。その鳥居

の傍を、なんで夜中に一人で通らねばならないのだ。

健治は憤懣やるかたない。とにかく、見ないことだ。鳥居の方を見ず、一気に走り抜けることに作戦を定めた。どんなことがあっても、走り抜く。そう決めると、羽根車の速度を上げた。だからだの上りになっており、上り切ったところが鳥居だ。上り切ったところで、息を継ぐことなく、そのまま一気に駆け下りることにした。

墓地のときとは違い、坂の上がほんのり明るい。鳥居の奥に稲荷が祀られ、裸電球が灯されている。灯明もある。

健治は耳も目も塞いだ。横を走り抜けようとしたとき、「健治」と何ものかが呼んだ気がした。後ろから、また「健ちゃん」という声が追ってきたと思った。気のせいだったかどうか。しかし、塞いだ目を通して、光の下に、小さな何かの影が揺れ動くのを感じた。

爆発しそうな息を吐いた。坂を下ったところで速度を緩めた。息を吐いたとき、サイダーが口の中に戻ってきた。それを吐き出した。もつたいないと思つたが、咳き込みながら吐いた。チクシヨと舌打ちをした。甘酸っぱい大好きなサイダーの味が、喉の奥に残った。

トンネルを過ぎカーブを曲がると、雑木が途絶える。右手奥に望む源さん屋敷の周囲は、以前はきれいに刈り込まれた日当たりのいい場所だったと聞く。何度か訪れたこと

のある健治も、それを微かに覚えている。

しかし、八年の間に、屋敷が藁と藁に覆われ、形の良かったカシや松は伸び放題になり、苔を張った庭には蛇や鼯が棲み付き、どこが入り口だかわからないほどに変貌した。

なまじ源さんを知っているだけに、傍を通るのが嫌だ。微かに覚えている源さんの笑い顔や声音が、自分が通り掛かるのを待ち構えているかもしれない。最後の力を込め、羽根車の回転をトップに上げた。バスのタイヤ跡が残る砂利道のそこだけを見詰めた。落ちかけた一枚の瓦がチラと目に入ったが、真直ぐに突っ切った。

源さん屋敷を抜けると、間もなく真下に我が家が見える。そこは丁度バス停になっている。小さなベンチが一つ置かれ、埃に汚れた標識が立っている。

標識に凭れ、ベンチに腰から崩れ落ちた。息が止まりそうほど苦しい。胸をさすり、空を仰ぐ。星がまぶしい。星たちは、今にも落ちてくるのではないかというほど近くにあり、大きく照っている。

「きれいな星空だったんだ」

空を帯状に横断する星々たちが、ギリギリキラキラ光り、頭上にひしめいていた。

小便を催した。急いでズボンを膝まで下げると、砂利道

の真ん中に向かって放出した。乾いた砂利道が、黒く濡れていく。気持よかった。と同時に、バス停でズボンをずり下ろし小便をするなど、昼間には出来ないことだと考え、もし誰かに見られていやしないかと周囲を窺った。

母は布団に入っていたが、眠っていないなかった。健治が裏戸を開けた音を聞き付け、起き出して来た。「遅かったねえ」卓袱台に準備した夕飯の味噌汁を温め直すらしい。ほつれた髪が首筋に貼り付き、後ろ向きの背中が疲れている。

母は一番下の仁を生んだ後体調を崩し、動悸と頭痛に悩まされるようになった。葉煙草の収穫期である今、肩で荒い息を吐きながら、父の後ろから地面を這い進む。疲れがたまってくると動悸が早鐘を打ち、息をするのさえ苦しくなるらしい。

母の顔が紫色にゆがみ、汗を滴らせ、胸を押さえてその場に蹲ると、健治は大急ぎで診療所に走らねばならない。

診療所の医師は心得ていて、バイクで駆け付けけると注射を二本打ち、水薬を三本置いて帰る。

「無理は禁物だ」言い残す言葉は決まっている。

「あれだけ言うと思ったのに」連絡を受けてやって来た祖母が母の枕元に座り、溜息をつく。

「子を何人生んでも、後を上手に切り抜けるのが賢いん

ぞ。こんな不器用な女に育てたつもりはない。健治もすっかり手助けをせにや。中学に入れば、立派な一人前じゃ。そんなことが分からん訳はなかるう。そもそも、親を助けるのは、子供の役目だし、その代表は長男だからな」

祖母は、決まって長男は総領だと言う。総領であるからには、親のことは勿論三人の弟妹の面倒まで、自分が見るというぐらいの気概がなければならん、と付け加えるのを忘れない。頑固で勤勉なことで周囲に聞こえている祖母は、孫にも容赦なく同じことを要求する。負けず嫌いであり、だらしのないところを他に見られるのを最も嫌う。

養女であった祖母は、五、六歳の頃から、一人前の働き手であり、まだ星明かりのあるうちに起き、学校に通う前に田畑で汗をかき、帰って来れば、またすぐに田畑に出た。もちろん、勉強も誰にも負けなかった、と言う。

「あたしはな」と前置きし、「学校の授業は、一度聞いたら忘れん。時間がなくても、参考書がなくても、絶対人に負けん」という根性があればどうにでもなる」

という持論を聞かされる。健治は、家の支えになることが嫌だとは思わないが、「授業をちゃんと聞いておれば、出来るのが当然ぞ」というところになると、首を傾げてしまふ。中学になると英語が始まり、数学も難しくなった。クラスでの成績は悪くはないが、県下一斉模擬テストになると、校内だけの順位では通用しなくなる。健治と抜きつ

抜かれつしている泰男は、毎朝ラジオ講座を聴いているというし、留美子もドリルとかいうものをやっっているらしい。

「今の成績で安心するんじゃない。高校の入試となると、島全体の競争になり、日頃の積み重ねがものをいう。まして、大学の入試ともなると、全国での競争になる。お前たちがやる一夜漬け勉強なんぞでは、てんで役に立たん」

今年大学を出て、長崎から数学の担当として赴任してきた高山さんは、「これからは農協に勤めるためにも、せめて高校には行かんばならん。教師になるには、まず大学じゃ。なぜなら、大卒相当者にしか与えられん教員免許というもんがあるんぞ」と言う。

「教師になるのは教師の家。百姓の子は百姓。漁師の子は漁師だ。それで全てがうまく行く。長男にはこれしかない」

祖母は母の看病にやつて来る度に、健治を前に座らせた。臥せている母にも、卓袱台で焼酎を飲んでいる父にも響く大声で、健治を正座させて言った。

祖母の前に出るのが健治は嫌だった。

長男は、大学どころか、高校にも出すものではない。島の外のことを知らしめることは、御法度だ。長崎の中体連に行かせたばかりに、島外の高校に通わせることになり、

大学に出すことになった。その自慢の長男は都会に就職し、三年置きに転勤とくる。住まいは、コンクリートで出来たアパートとやらで、鉄の扉で仕切られている。

嫁が来て子が出来ると、島のことなぞまるで頭の隅になり。親が生活を切り詰め、ようよう工面して学資を送り大学を出したばかりに、二十年経った後には年寄りだけが残され、田も畑もセイタカアワダチソウに食い潰されてしまった。と、誰もが知っている、隣村の例を持ち出す。

隣村の浦川の長男宗太郎は、島始まって以来の秀才で、全国一の難関といわれる大学に現役で受かった。その宗太郎は、テレビで毎日全国版のニュースを読んでいるので、島内では知らない者はいない。

浦川とは親戚筋に当たるものだから、祖母は、「昔は宗太郎もあまじやなかった。根は優しい子じゃが、仕事が宗太郎を島外に運び去ってしまった。盆も、正月も、帰る暇はないというし、時期外れに帰って来たところで、庭の草一本引こうとはせん」と激してくる。

こと成績では、祖母自身人一倍負けず嫌いなくせに、「島を捨ててはならん。そのことが、勉強がどうのこののより、はるかに大切。この理屈のわからんやつはとんでもない阿呆じゃ。健治もよく心することだな」となる。

健治は、いつも叱られているのだと思う。成績も負けてはいけないうが、上の学校には進ませないという理屈だ。こ

れがまるでわからない。いったい何度、同じ言葉を聞かされることだろう。母が発作を起こす度に祖母はやつて来るのだから、数えきれない。

「自分の親がこう頻繁に苦しい目にあうのを見て、まさか何も思わんことはなかるう。いいか健治、お前の肩に全てが掛かっている。長男というものの責任は重いんぞ」

健治には、宗太郎がまぶしく見える。自分の能力を、一度だけでも広い世界で試してみたい。長男だから最初から目隠しをする、ということには合点がいかない。

多分、ムツとした顔になつてゐるのだろう。

「そんな反抗的な目でどうする。お前には田畑全部が残るけど、亘たちは土塊一つもらえないんだ。亘たちは、島外に出て行くため、高校ぐらいは出さんならんが」

いつもこう締めくくられる。

留美子の家は、村役場の裏手の高台にある。父は農協の支所長だ。若いのにやり手だと、評判が高い。支所長は、留美子の母である妻を胸の病気で亡くしたため、二十歳を出たばかりの部下と再婚したらしい。

「支所長ともなると、二度目も別嬪が来てくれる。あんまりと違うか」

村人たちは、垂涎の目を向け、毎朝黒塗りの自動車出勤する支所長を見送る。

留美子が中学校まで通うには、役場の横を抜け、県道を五分ばかり歩けばいい。健治は、役場下の道を二十分かけて歩く。健治の家からは、雑木の茂みにさえぎられ、海が見えない。隆則の家からも見えないという。

中学校で五人だけ泳げない者がいるが、健治と隆則は泳げない。隆則もそうだろうが、健治は殆ど海に行ったことがない。行かせてもらえないのだ。

精米所の末広や魚屋の金太たちは、夏休みには朝から晩まで泳いだり、魚釣りをしたり、サザエや鮑を獲ったりして遊んでいる。亘は、ときには末広たちの後について行き、アジやベラを釣ってくる。泳ぎは、自然に覚えたらしい。

「この忙しいときに」

「もしものことがあつたらどうする」

健治が末広たちに誘われたと言うと、母から咎められる。母の顔は黒ずみ、目の下には隈をつくっている。

「留美子も来るんだぜ。留美子の水着はひらひらがついて、かわいいぜ」

「潜つて、留美子の腹を下から見ると。いい眺めだぞ」

末広と金太は、得意のクローリングで沖合に出、留美子を待ち伏せするのだという。そのことを考えただけで、健治は口惜しくて、涙が出そうになる。

海に行くどころか、健治はヤニと土にまみれてベトつく体で、籠に山盛りの煙草の青葉を背負い、リヤカーに積み込む。父と二人で籠を担いで何度も往復し、荷が一杯になると、納屋まで運ぶ。母は、籠の荷を背負ったり、リヤカーを押ししたりすることが出来ないで、昼飯の後片付けをし、夕飯の支度のために早めに戻って行く。

三歳になる仁の世話は小学四年の清子の当番で、一日中おぶっている。清子も学校から帰ると、すぐに仁をゆわえ付けられるので、遊びに行けない。

「長女だもの、家の手伝いをするのは当たり前だよ。それに、母を助けることで、先々のいい勉強になるんだ」

祖母は、清子にも手厳しい。十八で最初の子をもうけ、二十の年に母を生み、さらに七人をもうけ、都合九人の母である祖母は、出来るだけ多くの子を生み、育て、自身は決して体調を崩したりなどしないのが賢い女だと言う。

涎を流し眠っている亘をまたぎ越し、窓際の机に向かう。十一時を過ぎていく。健治が学校から帰ったのは四時。すぐに畑に出て、畑から戻って来たのが九時。水を浴び、夕飯を食って、ようやく健治と亘の相部屋である納屋に入った。

亘は県大会の練習を済ませ六時頃に学校から戻り、先に一人で飯を食い、九時前には寝ている。健治は、畳の端に

エビ状に転がっている亘が羨ましい。何と云ったって、長崎の県大会に行ける。十日後には出発だ。

「めちやくちゃ練習がきつい。今日も、泡を吹いて倒れた奴が二人いた。ボールを蹴るより、走るんだ。走って走って、走りまくる。陸上部の連中の二倍も走るんだ」

亘の自慢である。走ることで校内では誰にも負けたことがないし、中体連の百メートルにも出場し、こちらも県大会にあと一步という二位だった。

健治もサッカー部に入っていたことがあるが、一年の秋に辞めた。母のことや、家の仕事のことを考えると、続けられなかった。もちろん、三年まで部に残っていても、レギュラーになれないことは明白だった。五キロ走で、一キロぐらいまでは何とかつけても、後が駄目だった。三キロを過ぎると、いつも最後尾にいた。目指していたキーパーに必要な、俊敏さに欠けた。キックも今一つだった。

亘の場合、右足でも、左足でも正確で力強いキックが出来る。もの怖じしない性格なのか、チャンスにめっぽう強い。フリーキックを直接ゴールしたり、コーナーキックにタイミングを合わせるのに、動物みたいな勘を持っている。

長崎への県大会出場は、平凡だったチームを、亘のドリブルやヘディングが優勝をもたらし、実現したことに違いない。しかし、もし同じことを健治がやったとしても、

お前の役目はここまでだ、と祖母たちに言われないうらうか。県大会へは行ってはならないのだと。

そんな勘ぐりをしてしまう。

亘は、足の先で突いても目が覚めないほどに、駢をかきながら眠っている。エビ状に曲げていた体が、ゴロリと回転して畳から板張りに落ちた。板張りの方が冷たいからか、今度は健治に背中を向け、また大きな駢をかき出した。

自分と亘とは全然違う、と健治は思う。祖母も、父も母も、近所での亘の評判を自慢に思っている。

「とんだ物入りだ」父はそう言いながら、「調子はどうか。せっかく行くんなら、長崎で一発決めてこい」とはっぴをかける。父は何度か長崎に行ったことがあるらしい。葉煙草耕作組合の視察旅行と、農協主催の慰労を兼ねた忘年会などで、数回行ったのだ。

「総合グラウンドはでかいぞ。客も二千人以上は入るからな、上がらんことが一番だ」

もともとスポーツが好きだから、視察コースの競技場には特別興味を持ったらしい。

母も、亘が日曜日に学校に出掛けるのに、二食分の弁当をこしらえてやり、真っ先に帰って来る亘のために、畑から早めに戻り、炊きたての飯をこしらえてやる。汚れたユニフォームの洗濯も毎日欠かさない。

「違い過ぎる」健治は、亘の尻を軽く蹴った。

電灯を小さくすると、布団に転がる前に股間のものを確かめる。ズボンの上からでも、それが大きくなっているのがわかる。ベルトを緩めると、バネがはじけたみたいに飛び出してくる。留美子は、今何をしているのだろうかと思う。まだ起きているのだろうか。言葉を交わすことは殆どないが、留美子が健治を意識していることだけは勘で分かる。健治が級長で、留美子が副級長であるということからだけではない。

健治が教室で留美子の後ろ姿を見詰めていると、留美子は決まってセーラー服の襟元に手を伸ばす。白く、やわらかい指が肩口から覗く。留美子の声は、細い。細いけれどもよく聞くとれる。健治が耳を澄ませているせいかもしれないが、留美子が喋るとき、誰も私語をしない。みんなも、留美子の言葉に耳を傾げようと、静かにしている。

健治は、一年前のことを思い出す。

テニスコートの留美子が、大きく伸び上がりサーブを打った。シャツが少しめくれ、臍のあたりがチラと見えた。

そのとき、パンツの中に失禁したのだった。

全く意図しないことだったので、最初留美子と関係があることとは、考えもしなかった。しかし、その日から、健

治はいつも留美子のことを思うようになった。もう起き出したのだろうかとか、今何を食べているのだろうかとか、夕方の仕事を片付けながら、留美子も手伝いをしたりするのだろうかとか、もう眠ってしまったのだろうかとか、留美子のこと頭の中いっぱい広がってくる。

布団に入り、股間のものの先端を撫でているときにも留美子のことを考えている。こんなときにどうして留美子のことを考えるのかわからないが、シャツのめくれ上がった臍の場面で頭の中を過ぎるとき、指に溢れるほどのものが放出される。

「高校、どうするの」留美子が聞いた。

クラス委員が集められ、教務主任から一週間後に迫った夏休みの過ごし方についての話があった。

家の手伝いをする。休みを有意義に、規則的に過ごすこと。海には、必ず年長者と一緒に行くこと。高校を受験する者は、怠らず自宅学習を行うこと。

教務主任は、同じことを二度いい、閲覧室を出て行った。

閲覧室は職員室の隣にあり、古い人体の模型や、宇宙の図が片隅に置かれ、一方にトロフィーや表彰状が飾られた部屋で、二十人程度の打ち合わせや、面談によく使われていた。

健治は、祖母や母のこともあり、高校のことを真剣に考えたことがなかった。高校は義務教育ではないので、授業料が別に必要になる。場所は島の玄関口である郷口町にあるので、バスか自転車を使わないと通えない。

「留美子は」

「わからない。でも、父は、女も学問をしなくちゃと言っの。これから、大学ぐらい出ないと困ることになるって。ときどき長崎に出張するから、本土の子供たちが、勉強で一生懸命競い合っているのを見掛けるんですけど」

留美子が、こんなことを話し掛けてくるとは思わなかった。授業中にも、自分から進んで意見を発表することなど、めったにないことだ。それでいて、寡黙とも違う。

クラスの男たちは、誰もが留美子のことを注目している。同じセーラー服を着ているのに、留美子は一人だけ違う。色が白く、細身で、女優のMによく似ているからだ。

男たちは、誰が一番留美子に好かれているかを競い合う。

精米所の末広は、父親の三輪車で何度も郷口町に行くので、郷口町にしか売っていないグローブやバットを見せびらかす。魚屋の金太は留美子の家に近いため、配達は自分の役目だと決めている。

「女は早く嫁に行き、丈夫な子供を生むのが一番だ」

いつも祖母が口にするくだりを思いながら、健治は耳たぶが赤く火照ってくるのを感じた。子供を生むためには、寝るときに、臍と臍を合わせなければならぬという。そんなことは、留美子には似合わないことだ。出来たら、留美子は誰とも結婚してほしくない。

「お母さんは、そつちを望んでいるみたい。でも私、しばらく結婚はしたくないの」

留美子は目を落とした。健治はホッとした。

「島の高校に行くん」

「まだわからない。お母さんのことを考えると、どんな形にしろ、早く家を離れて行った方がいいと思えるの。中村君は」

「決まっていない」

普段の成績からすると、健治が高校にも、大学にも行かないなど、まずあり得ないことだと言っている。

留美子は頷かなかつた。少し唇を動かし掛けたが、それ以上話さなかつた。ホームルームの時間が迫ってきたので、急いで教室に戻らなければならなかつた。

葉煙草の乾燥が仕上がれば、吊り下ろしの作業になる。

まだ温みの残る葉を、吊り下ろした縄から外し、束ねて収納する。吊り込みのときの重さに比べると、何十分の一という軽さになるので、比較的楽な作業のうちだ。それで

も、朝から取り掛かり、日暮れ近くまで続いた。健治は学校から帰ってすぐに駆け付けたので、四時間手伝った。

布団に入り、留美子のことを考える。留美子のごとは片時も忘れないし、眠る前には必ず留美子に話し掛けることにしている。ホームルームの前の、あの留美子の表情を思い起こす。いつもの留美子とは違った、どこか投げやりとも思える、初めて見る留美子の表情だった。

クラスでの留美子は、セーラー服の背筋をすつと伸ばし、微笑みを絶やさぬ。支所長の家の子らしく、ゆつたりと振る舞う。だから、クラスばかりではなく、学校中の視線が留美子に集まる。

留美子の家は、留美子とは十歳ぐらいしか違わない母と、その母が生んだ弟が一人だという。母に、二番目の子がある。留美子には弟のお守りがある。留美子にはまかされていないらしく、広い家の離れに留美子の部屋があるのだ、と金太が教えてくれた。

留美子が、「高校はどうするの」と言ったときの目はちつとも笑っていないなかつた。

あと三日で夏休みに入る。中学生最後の四十日の休みだ。健治の進路は決まっていない。

「高校は駄目なん」何度か母に聞いた。

「亘や仁のことがあるし、お前は長男だろ。健治にしか

りしてもらわんと」

母は青黒い顔色を歪め、表情のない目になる。

「あ のとき、源さんにもらわれていたら」

と思つてはみるもの、源さんは既にいないし、思つても甲斐のないこととはわかつている。しかし、源さんが奇妙なことを言つていたことは覚えている。

「健治はおいの子だったとしても不思議じゃなかとにね」

「従妹でなかつたら、おいの嫁に来てほしかつたんやが」という意味は何なのだろう。以前、母に尋ねたことがあるが、「そんなわけのわからんこつ、言うんでない」と、茶碗を投げ付けられそうになつたことを思い出す。

クラスの半分が高校進学を決めており、留美子も進学組だ。泰男も、末広も進学組だし、隆則も一学期の成績が少しだけ上がった褒美に、進学組に入る許可を得たという。

「お前の成績でも、あかんのか」

末広が怪訝そうに言う。末広は精米所の三男だからか、長男の健治のことが理解出来ないらしい。

「俺んとこ、一番上の兄貴は大学出て、銀行に入ったぞ。多分もう島には戻つて来ないな」

「精米所の後はどうなる」

「継ぐ者がいなけりや、辞めるまでだとか言つてたな、親父。でも、幸い姉婿が仕事を継ぎたいらしいから、辞める

ことはなさそうだ」

「そういうもんか」

「らしいな、うちの場合。子供は自分の料簡で仕事を探せ、だとき。ところでお前さあ、えらい目に会うんやな。いや、それより、留美子のことどうするつもりだ」

「どうするつもりつて」

「他の奴にとられて構わんのか」

「俺に關係なんかないだろ」
健治の狼狽えた声に、末広は、ほうという顔になつた。

「だったら、俺がもうぞ」

健治は待つた。約束の時間から、三十分が過ぎた。部活の終わりを告げるチャイムが鳴つて、一時間近くになる。校内には、もう殆ど人影はない。やつぱり来なかつた。

昼休みに、留美子にメモを渡した。考えに考えた挙げ句、勇気を出して実行した。初めてのことで、顔が火照り、渡す前も渡した後も、シャツが濡れ通るほどの汗をかいた。

こんな恥ずかしいことなら止めとけばよかつたと、閲覧室の壁に背をもたせ、立ったり座ったりした。背をもたせた位置は、廊下からは本箱の陰になつており、見通せない。

何故こんなことに及んだのか、自分ながら信じられな

い。

「留美子のこと、他の奴にとられて構わんのか」

末広の言葉が、頭の芯にあった。留美子に会い、何を言
い出そうという訳でもない。

「部活が終わったら、閲覧室に来てください」そう書い
た。

留美子は、メモを読んだらうか。もし読んだとして
も、一人で放課後の閲覧室に来るだらうか。健治は、自分
のことがひどく疚しく思え、いたたまれなくなつた。

柱時計が六時を刻み、さらに十分が過ぎた。健治は腰を
上げた。本箱の陰から、閲覧室の出口に歩いた。やはり誰
もない。ノブに手を掛けた。

「中村君」

後ろから呼ばれた。留美子の声だ。留美子が立ってい
る。

「どこにいたの」

「展示箱の横」

「いつ頃から」

「ずっと前から」

健治は、留美子を椅子に座らせ、自分は三つ横の椅子に
腰を下ろした。

「来てくれるとは思わなかつた」

「中村君の顔、とても淋しそうだったから」

「そんなことはない」と言おうとして、健治は口ごもつ
た。

「それに、私のこと誤解しているんじゃないかと思って」

「どういうこと」

「よすことにしたの、高校。看護婦見習いになるわ。福岡
か長崎に出て」

「どうして」

「働くの。働きながら勉強する。自分のことは、自分でや
れると思うから。そうすることが、一番自然なの」

「いつか聞いたことがあるんだけど、お母さんに気兼ねし
てのこと」

「ゼロではないわ。でも、甘つたれの自分が情けないの。

中村君みたいに、島に縛り付けられる人がいるというの
に、私は自由なんだから。大阪にだって、東京にだって、
外国にだって行けるのよ」留美子の声は変にくぐもり、い
つもの白い横顔が青ざめて見えた。

「無理してないの」

「ううん、と首を振る。」

「中村君は、やっぱり高校、よすの」

うん、と言い掛けたが、後を言い淀んだ。青黒く浮腫ん
だ母の顔と、厳しく言い募る祖母の顔が浮かんだ。

「長男だから」

なぜか、浦川宗太郎のことを思った。健治は、何で留美子を呼び出したのだったか、忘れようとしていた。

「中村君、将来のこと考えたことある」

「将来って」

「例えば、十年先」

「多分、朝から晩まで田や畑で働いてる」

「そうに違いないかもしれないわ。ただ、うちの父の話だけど、これから都会では物を造り、売るため、工場で働く人が増えるだろうと言うの。そうになると、田や畑で働く人が減り、農協の会員も減って行くんじゃないかって口癖みたいに言うのよ」

「分らないではないけど」

「都会で働き、お給料をもらうことが、これから普通になるんじゃないかしらって」

留美子は、父が出張の度に買って来てくれるという参考書や、ハンカチや、鉛筆を学校によく持ってくる。末広や隆則たちは、それをときどき貸してもらおう。

「しかし、ぼくの場合、家を離れることは出来ない。だから、高校に行くことも叶わないし、給料取りにもなれない」

「中村君の成績でも、駄目なの」

「ああ、亘や仁を給料取りにするため、僕は田畑を守らねばならないという」

留美子は、閲覧室の椅子から腰を浮かし掛け、「やっぱ帰るわ」と言った。立ち上がり掛けた留美子から、甘酸っぱい石鹼の匂いが微かに漂った。

「呼び付けてごめん」

健治は離れたまま、留美子を見上げた。

「外はまだ明るいから」

早く閲覧室を出るよう促した。ずっと話をしていたいけど、それはよくないことだと思えた。留美子と向かい合っているということが、息苦しかった。閲覧室を出て、教師やクラスの誰にも会わずに、帰ってほしかった。

「帰るわ。お母さん、この頃お腹が重たくて辛そうだから」

留美子は背を向けると、一度も振り返らずに出て行った。

健治は、しばらく椅子から立てなかった。ほんの今まで、一メートルの距離に留美子がいた。初めてのことだ。留美子とこんな近い距離に、しかも二人きりでいたのだ。

その間中、健治は仏頂面をしていた。うまく言葉にならなかった。誰かがふいに閲覧室に入って来やしないかと、気が気ではなかった。手の平に、脇の下に、濡れ通るほど汗をかいていた。

夜、布団の中で硬くなった股間のを握りしめた。先

端は、既に濡れていた。握りしめた途端に一気に爆発した。

臉の裏には留美子がいた。しかし、留美子の目鼻は妙にぼんやりしていた。こちらを向いてなどいない。だんだん遠くに去って行く、と言つてよかつた。

留美子は、末広と結婚するかもしれない。末広は、大学にも行く筈だ。そうしたら、教師になり、校長にだつてなれるかもしれない。とてもたちうち出来ない。

末広も、クラスの誰だつて留美子が好きだ。留美子は、色が白く、勉強もよく出来る。やさしくて、拗ねたところなど見たことがない。勉強の出来る子は他にもいるし、色の白い子もいる。でも、気がやさしくて、勉強も出来るとなると、留美子が一番だ。

泰男や金太も、留美子が好きだ。金太は、魚を届けるとき、必ず留美子の部屋の前を通り、声を掛けるといふ。

健治は、爆発した後も縮もつとしないものを握つたまま、こんなことを考えている自分が、とてつもなく汚らわしいものに思えてならなくなつた。

留美子が高校に進まないということが、いっぺんに学校中に広まつた。末広も、泰男も、どうしてだと、腕組みをしてる。

「支所長の子が、看護婦見習いかあ」

「働きながらだよ」

「何でもよ、母親を胸の病気で亡くしたんで、そのときから考えてたというぞ」

金太が、直に留美子から聞いた話だ、と得意に言う。

「本当は医者になり、母を奪つた胸の病気を治すというのが一番の目標だつたらしいけど」

金太は、魚を運んだとき、留美子の部屋の前で三十分近く立ち話をしたと言う。

「留美子らしいな」末広が呻いた。

「違ういな」泰男も頷く。

「高校組は五割を切るかもしれない」

「去年より、就職求人数が三割以上増えたという。とにかく俺たちは金の卵、なんだとよ」

「高校に行かなくても、機械は造れる。作物も魚も獲れるというわけだ」

「俺も、よく言われるんだ。親戚から」泰男が珍しいことを言う。父は、町の観光組合に勤めている。

「安月給だからさ。良い給料もらうには、絶対学校行かんならん」といつも言っていたから、意外だった。

「親父は尋常小学校出だから、本当は事務員にはなれんかつた。たまたま席が空いたところに運良く臨時で採つてもらつたらしい。そうだったから何とかなつたもの、もともと田も畑も持たないんだから、食つて行けん」

自嘲気味に言う泰男のことを、羨ましいと健治はいつも思っていた。勤め人だと、夜中まで泥だらけで働く必要はないし、長男であつても家に縛り付けられることもない。

「親戚の連中、親父が運良く事務員になったものだから、子供の俺にだつてその線があるんじゃないかと言う奴がいる。高校に行きたけりゃ、働きながら通う道もある、とね。街には、定時制という高校があるらしい」

「働きながらか。どうやつて勉強するん」

「夜、高校に通うんだ。自分の働いた給料で授業料を払う。留美子の場合と一緒だ」

ふむ、と末広が体を乗り出す。留美子という言葉に反応したのか、自分の働いた給料で授業料を払うというところ「に反応したのか、「どこにあるんだ、定時制」と聞いた。

「福岡や長崎にはあるらしい」

「まず、何でもいいから仕事を見付ける」

「それから、雇い主に、学校に通うことを承諾してもらう」

「行かしてくれるんか」

「昼間の働き方次第だろう」

働き手を確保するためか、会社の人員募集に〈定時制通学可〉と書いて来るところがある。

「留美子の場合、看護学校に通いながら資格を取るんだ」

金太が、「留美子は、福岡に出るらしい」と言った。

健治は背負い籠を担いで葉煙草の脇芽をむしりながら、どう切り出しているものかと考える。

一畝後ろで母が草を取り、父は二畝先で脇芽をむしっている。母はときどき激しく咳込み、その度に浮腫んだ顔を持ち上げる。昨夜からの状態が、一刻一刻悪くなってくる気がする。畝に突つ伏したところで、村の診療所に走る自分の姿が何度も頭を過ぎる。そうなると、一週間は床に着くことになり、祖母がやつて来る。

健治の頭には、定時制のことが大きく膨らんできた。留美子が看護学校に行くからということもあるが、自分にも切り出せない話ではないのかと思いだした。

福岡か長崎で働くということがどうこうではなく、長男が家を離れることが一番の問題なのだ。祖母は、来る度に健治にそう釘を刺すことを忘れない。

留美子は自由だ。どこで働いても構わない。多分留美子は、継母の元から早く出なければならぬのだ。そうすることが、家族のために最も望まれるのだろう。

健治の場合は違う。発作で苦しむ母を見捨てることも、家を離れることも出来ない。長男は、総領としての務めがあり、守りの要なのだ和祖母は言う。

しかし、と健治は思う。浦川宗太郎の母は六十をはるか

に過ぎている筈であるが、淋しそうな顔をしているところを見たことがない。他家より多く所有する田も畑も、大方は草茫茫に荒らしているけれど、「見てくれが悪くて堪忍な」と、笑顔で頭を下げるものだから、「さすが、大百姓の浦川は別格だ」と、とやかく言う者は殆どいない。

何度も反芻していた言葉は、意外にたやすく口を出た。

母が畦に筵を敷き、昼飯の支度にかかろうとした。

「この野郎」

健治は後ろ向きの母の動きを制し、傍の棒杭を引き抜くと、母の背中目がけて力まかせに打ち下ろした。一発目で微かに手応えがあったので、間を置かず二発目を打ち下ろした。蝮だ。頭から血を流したやつが、棒杭に絡みついてもがく。力の限り、棒杭を締め潰さんばかりにもがく。奴は、母が敷いた筵の、わずか五十センチばかり後ろの草叢に、目を光らせ、とぐろを巻いていた。健治の目と向かい合ったとき、その目は漫画で見た恐竜の目より赤く、威圧的だった。健治の頭から血の気が引き、冷や汗が湧き出た。何かの叫び声を上げたのは、健治だったのか、母だったのか。

「でかいやつだ」

遅れてきた父が、鎌で蝮の首を叩き切った。それでも、胴体は棒杭をきりきり締め付けてくる。傍らに、切り落と

された頭が歯を剥き、目を見開いている。頭も、胴体も別々の生き物となつて激しくもがく。

「蛇の生殺しはいかん」

父はもう一本の棒杭を引き抜き、頭を粉々に砕き、健治の棒杭に巻き付いたやつを叩き、胴体が力を失い地面に伸び切るまで叩き、砕いた。それを鎌でひっかけ、浅く掘った土に埋めた。父の額から首筋から、汗が噴き出した。

「蝮も、蜥蜴も、百足も、鼯も、みんなそいつらの領分で生きとる」父はタオルで首筋に流れる汗を拭い、蹲った母を見下ろし、立ち尽くしている健治に言った。

「お願いがあるんだ」

健治の口から、自分でも予期しない言葉が飛び出した。

「福岡に出たい」一気に言った。

「何のことだ」父は顎をしゃくり、鎌を手にしたまま、仁王立ちになった。母は筵の端で、青ざめた顔をしている。

「働きたい。自分で給料を取り、家にも仕送りをし、定時制に行きたい」

「何だ、それは」

「働きながら通える高校がある。福岡にはある。だから、福岡で働きたい」

「家を出て行くちゆうか。じゃ、田畑の仕事は誰がする」

「わからんけど、ここで働けん分は送る」

「アホウ。銭金だけで片付くことじゃない」

「行きたい。福岡にも、高校にも。亘は中体連で長崎に行くじゃないか」

父は蝮の頭を叩き切った鎌を煙草の畝にザックと突き刺し、筵に腰を落とすと、しんせいに火を点け、ムウと唸ったまま黙り込んでしまった。

母は咳き込みながら、のろろと箆から麦飯を三つの椀につき分け、タクアンを添えて差し出した。父は一言も発せず、飯を食い、タクアンを噛んだ。ヤカンの麦茶を椀に注ぐと、がぶりと一口飲み、まだ麦茶の残っている椀を母の膝元に放った。

母の青い顔には表情がなく、気持の悪い音をたてて咳き込む。そのたびに、胸を掻き毟り、荒い息をする。このまま突っ伏してしまうのではないかと、健治は思った。

亘は目刺しと、かぼちやの天麩羅と、卵かけ飯を食い、八時前には寝たという。母は明日朝早く県大会に出発する亘のユニホームをたたみ、ソックスなどをバッグに詰めながら、何度も首筋を揉む。疲れているときの決まりの仕草だ。今日の葉煙草の芽摘みの間中、青黒い顔色で、絶え絶えに息をしていた。

父は、天麩羅をさかかなに焼酎を飲んでる。何日も剃らない髭が、湯飲みの焼酎を飲む度にこぼれた水滴で濡れる。

「昼間のあれは何のことだ」機嫌のよくないときの声だ。

「定時制、何とかいうあれだ」

健治は、汗と泥とヤニにまみれたシャツとズボンのまま、風呂を焚き付けてきた。

「亘は長崎にも行くし、高校にも出すんやろ。亘ぐらいになるとサッカーを続けるため、高校に行かせんならんやろうし、仕事に付くためにも行かんならん」

それで、というふうに父が後をせかす。

「同じようという訳じゃないけど、ぼくも高校に行きたい。そのかわり、学費は自分で稼ぐ。少しぐらいの仕送りはある」

つまみの梅干を口に放り込んだ父の顔が、大きく歪んだ。

「銭金だけの問題じゃないんぞ、ええか」

「わかってる。後のことを誰が見るかということだろ。高校を出たら、必ず島の役場と農協の試験を受けるつもりだ」

「しかし、お前が福岡に出とる間、誰がうちの田畑の面倒をみる。清子も仁も小さいし、母はあんな具合だ」

青黒い顔を歪ませ、肩を上げ下げしながら息をしている母の方を顎でしゃくる。

「こういう具合なんを、いったいどうしろと言うんじや。まあ反吐吐くほど頑張つて、田畑の面倒はぎりぎりでも何と

か凌ぐとしてもだ、いっぺん街に出た奴で、戻って来たちゆうためしがない。三年、四年と暮らすうちに、必ずびつしりと根が生えちまう」

祖母がいつも言う台詞と同じだ。

「ま、それだけ街がええということよ。わかつとる。俺だつて、お前たちのことをうち捨てて出てみたい」

父は梅干しの種を口の中で転がしていたが、プツと土間に吐き出した。

「理屈じゃないのさ。こいつは。どうしても出るちゆう奴の首に綱をつけて、家に繋ぎ止めるといふ筋合いのものじゃない」

「ぼくは、誰からも、いつのときも出るなと言われてきた」

「出るなどは言わん。しかしだ、こういう状態で出れるか、と言うんじや。お前が出るのが、ちゃんとお天道さんに説明出来るかだ」

「必ず、戻って来る。だから、一度だけ、四年だけ福岡に出してほしい」

健治の頭を、留美子の白い横顔がよぎった。

「そこが問題なのだ。昔な、お前と同じように、俺も死んだ親父に同じことを訴えた。師範に出してくれとな。わざわざ担任が二回もやって来て、頼み込んでくれた。家に金がなかったわけじゃない。しかし、親父は簡単に首を縦に

振らなかった。三度目に担任が来てくれたとき、頑強に拒んでいた親父が、悲鳴をあげそうな顔で黙って頷いた。そのときの、俺の喜びといったらなかつた」

「それだつたら、ぼくの気持ちがわかる筈だろう」

「わかるさ。口惜しいなんでもんじやない。で、その親父だ。三日目の朝、いつまでも起きて来んのだ。たいてい五時には起き出して、一仕事して来る筈の親父がカタリとも音をたてん。寝屋を覗いた妹が、素つ頓狂な大声を上げた。布団の中で冷たくなつていたので」

「三十八歳だとか」

「どこも悪くない。人一倍酒も飲むし、力自慢だ。若いくせに、農協や村の役を付けられ、頼られていた。棟梁の源さんとは仲良しでな、源さんと親父とのコンビで、青年団のリーダーもやった。源さんも、親父がせつかく許してくれたんだからと、強く肩を押ししてくれとつた」

父は、結局師範を断念した。年子の弟が二人、妹が一人いて、学校どころじゃなかつた。

「そのときよりやあ、まだましか。しかしな、定時制はいかん」父は、吸い込んだ煙草の煙を天井に向けてパツと吐き、目を見開いた。

目の先に、神棚がある。父は、水と飯を朝一番に供えるのを、一日として欠かしたことがない。煤で黒ずんだ神棚

の戸を、口をひき結んだまま見詰め、三度頷いた。

「ということとはだ、高校に出せということ、になるか。実は、母さんの妹の弓子さんが、佐世保で預かってもいいと言ってきた。詳しい訳は知らんが、お前のことがどこからか聞こえたらしい」

健治は、父の言葉の意味が理解出来なかった。

父は言った後、かぼちやの天麩羅を噛み切り、焼酎をいきなりあおったものだから、激しく咽せた。

「せっかくの申し出だが、弓子さんには断りの返事をする。ということで、高校には出す。そこでだ、学校の合間には、精一杯家の仕事をやる。どうだ」変な嗄れ声で言った。

健治はびびくりした。祖母の顔が浮かんた。

「わかっとる。お前のその成績で、中学までで我慢しとけ、とは俺には真実言えんのよ。しかし、定時制はいかん。福岡も、長崎もいかん」

あつけなく進路が決まった。結局、健治にとって、島外に出ることが一番の問題だったのだ。島を捨てて出る。それは、即、島の者ではなくなるということの意味する。

これが三日前だったら、床を飛び跳ねて喜んだに違いない。しかし、今は違う。留美子は、福岡で看護婦見習いをするのだ。多分、医院の見習いをしながら、看護学校とか

いうところに通うのだろう。

明日が一学期の終業式という日になって決まった進路を、早速担任に報告しなければならぬ。嬉しい筈のことが、妙に気分を浮かなくさせた。

布団に入つて、股間のものを握りしめた。それは、だらしとした気分を映し込んだためか、しまらなかつた。鬱陶しい思いが胸先を行き来し、泣き出した気分だった。

閲覧室で一メートルの距離で向かい合つたときの留美子から、急に遠ざかつて行く。布団の中で、健治は二つ、三つと柱時計の刻む音を聞いたまま眠れなかつた。

健治は、担任に受験を決めたことを伝えた。担任は、健治の肩を叩き、「そうか、そうか。うちのホープだからな。お前なら、試験のことは何も心配ない」と頬を緩めた。

「校長から、中村はなぜ受けないんだと、毎日聞かれるんだ。なにせ、お前の知能指数はな」

そこまで言つて口ごもつた。

留美子が傍で聞いているのを知つていた。セーラー服の襟の白さが、一際光を放つていた。

「留美子も、今受験と聞いたところだ」

健治が振り返ると、留美子は頬を少し赤らめ、決まり悪そうに黙つて頷いた。

「看護婦になるには、高校に行つてからの方がよいではないか、と家族に勧められたのださうだ」

留美子は担任の言葉に、一層頬を赤らめた。

「こうやって、着々と君たちの春が決められて行くんだねえ。今が、それぞれの大事な通過点になつて行く。そのことに、教師として、立ち会つているといふ訳だ」

感極まつたときの担任の口癖だ。後は、うんうんと一人で頷き、首を振る。

終業式は校長の短い挨拶があり、学年主任からの注意で終わった。

「どういうこつちや」

式場の体育館の出口で、末広が待つていた。

「何が」

「決まつとるじゃねえか。お前と留美子のことさ。何で二人一緒に、こうなる」

「留美子のこととは知らん。俺だつて福岡に出たいと言つたら、引き留めを食らつただけだ」

末広は唸つた。

「知つとるぞ。お前と留美子が、閲覧室で密かに会つたのを。隆則が一時間以上話し込んでた、言うてたぞ。奴は、廊下を三度も往復したさうだ」

健治の胸に、あのとときの密かな興奮が蘇つてきた。

「留美子とピタツとくつついて、多分あれの最中だつたか

もしれん言うてたぞ。チュツとかやらかしてたんだらうと。隆則は、磨りガラス越しに見たんだとよ」

健治は、全身の血が頭に上つてくるのを覚えながら、そんなふうにも思われるのも悪くないと思つた。しかし、留美子には一メートルより近くには寄ることが出来ない。

遠くからいつも気にしているくせ、間近に向かい合うことが出来ない。胸の奥の方が、ふいに痛くなるのだ。

「バカ言え」

「真つ赤になつてるじゃないか。ふうん、やつぱりそうか。健治も大学行つて、校長さんになるのか」

「大学に」

末広は、坊主頭を掻きむしりながら、「やつぱり留美子は、健治と一緒になるのか。俺だつて、大学行くかもしれないのぞ」と言つた。

終業式の後には、グラウンドで、県大会に出場するサッカー部の出発式となつた。午後のフェリーで出発する部員を乗せるために、グラウンドの端にバスが止まつていた。

亘たちイレブンは、気を付けの姿勢で横一線に並び、校長の激励を受け、三年生のキャプテンが代表して、「正々堂々と」の宣誓とやらを空に向かって叫んだ。

校旗を掲げた亘は三人目を歩き、拍手の中を送られ、グラウンドを大きく迂回してバスに乗り込んだ。昨夜母がアイ

ロンを掛けていたユニフォームが亘の細身の体をびったり包み、得意そうな表情がバスの窓からも見てとれた。

「亘、一発頼むぞ」

「長崎の連中に負けるな」

生徒たちだけでなく、バスの周囲を村の連中がとり巻き、檄を飛ばしている。菓子や飲み物を差し入れる者もいる。

「カッコいいよな」

「健治、亘に頭上がらんば」

「成績以外は全部亘だな」

「亘の成績も中の上じゃないか」

末広や隆則たちが口うるさい。健治は、これまでずっと亘に妬みに似た気持ちで接してきたが、少しだけ軽やかになった気分だった。

自分も、高校に行ける。そうすれば、役場にだって入れるかもしれない。役場や、県の支所や農協に勤めている人は特別な人だ。白いシャツを着て、背広を着て、大勢の村人たちの前で話をする。給料も多くもらえらしく、家の構えも、着る物も、食べ物も、贅沢である。

バスがゆっくりと動き始めたときだ。健治の手に、そつと触れた者がある。留美子だった。留美子は健治とは反対の方を向いたまま、健治の手に小さな紙片を押し付けた。

健治の胸がいきなり早鐘を打ち始めたが、留美子の指が

差し出す紙片を素早く受け取ると、手の中で小さく丸めた。周囲を見渡すと、末広も隆則もバスに手を振っている。健治のことには気付かなかつたらしい。留美子は、数メートルの距離にスツと遠ざかり、歓声の中にまぎれた。

十五分待った。留美子は現れない。

学校の裏手の木立の中だ。校舎の屋根を見下ろす位置になっでいて、木立を二十メートルほどくぐると小さな鳥居が立っている。木立に入るところはあまり見晴らしがきかないが、鳥居のあたりはきちんと整理されており、ぽっかり空に開いた境内になっている。

健治が夜中の十二時に傍を走り抜けた、あの稲荷社だ。

健治は、初めてこの木立をくぐった。学校からの距離は五十メートルというところであるが、校則で立ち入りが禁止されている。何年か前、人が縊れたことがあって、大人でさえめつたに近付かない。そんな想像を巡らせると、何かが首筋を掠め、背中がぞくぞくとくる。シン、とした静けさも緊張を強いられる。

「一時に、稲荷社の鳥居のところで」

留美子のメモに書かれていた文字だ。どうして、留美子が健治にメモを渡したのか、理由が分からないが、とにかく健治は三十分前に鳥居のところによって来た。その三十分の間、誰もこの木立をくぐって来た者はいない。ぽっか

り開いた境内には、学校のチャイムも、県道を走る車の警笛も聞こえない。

なぜ、留美子はメモをくれたのだろう。閲覧室で会ったときは健治から誘ったのだが、あれは学校の中だ。この境内には、誰も踏み入って来ない。こんなところを、なぜ選んだのだろう。

「ごめんさい、待たせてしまって」

ふいに、背後から留美子の声が出た。鳥居から数十段の石段が上っており、その中途から留美子は現れた。

「三十分前から、ここにいたわ」

「今来たんじゃないの」

「悪いけど、ここから中村君のこと、ずっと見てた。なぜこんな場所を選んだのかと言うとね、よくない場所かもしれないけど」

健治の下半身で、なにかが疼いた。

「私の庭なの」

留美子は、階段を一段一段ゆつくりと下った。スカートの前に鞆を提げ、一段一段と、思い詰めた表情のまま降りて来た。留美子は健治の横に立つと、石段に腰を降ろした。

甘酸っぱい石鹸の匂いがした。

健治は、メートルの距離を置いて腰を降ろした。

「母に聞いたの」

「お母さんに」

「そう、母に聞いたの。母に聞くときは、いつもここに来るの」

「ここに」

「この庭に来ると、三年前に亡くなった母に会えるのよ。もう少し奥に入ったところに、お墓があるの」

留美子は立ち上がった。健治の頭の中が、少しまとまりかけた。

「意気地がないのよね。ふっと、後三年、家にいさせてもらってもいいかなと考えたの。笑われるかもしれないけど一度だけ、医師を指してみたいとも思ったりして。母がそれほど悪くなかったとき、半分冗談だったんだけど、五年経ったら、私できつと治してあげるから頑張つてと、励ましてきたの。でも、結局、母は半年しかもたなかった」

「そうだったんだ」

「おかしいわね、話がコロコロ変わって」

留美子は、クスリと笑った。

「おかしくないよ」

「今のお母さんには、卒業したら福岡に出たいと言ったの。見習いをしながら、看護婦を目指したいって。お母さんは、それはとてもいい考えだけど、父に相談してからにしないと言ったの。多分、父の立場を心配してのことね」

「支所長のお父さんだから」

「父は、大学まで出ると言うの。自分が出ていないから、子供にはキャンパス生活をさせると決めてるらしい。今のお母さんは、私のことなどどうでもいい筈だけど、多分支所長の娘を中学卒で追い出したと言われたくないのね」

健治は、留美子の横顔を見た。留美子は、いく分類を赤らめ、少し視線を落としたまま言葉が続ける。

「結果的には、簡単に方針転換をしたということになったの。このお墓を何度も訪ね、母にも聞いたわ」

「お母さんは何か言ってくれた」

「今一番必要なことは、チャレンジすること。後ろばかり見ていないで、前を見ることだと。私、母が亡くなってから、いじけて、誰に対しても意固地になっていたのかも知れないわ。今のお母さんのこと、心の底でも許せなかつた。父の気持も、私の方にはちっとも向いていない。でも、二人目の赤ちゃんも生まれることだから」

留美子は、健治がどうして高校を受けることになったかを、百合の花が手向けられている墓の前で聞いた。

「福岡に行かせたくないんだ、多分。福岡に出したら、絶対帰って来ない。それに、たちまちのところ働き手も減ってしまふ。長男の勝手は許されないんだ」

「実のお母さんがいるって、羨ましいわ」

「そうかなあ。母は、いつも息苦しい、心臓が苦しいと、土気色の顔をしている。時と場所を構わず、発作を起し、不機嫌になる」

それ以上言わなかった。家の中のことをどうこう言うこともはばかられたし、細々と母のことを言うことが、母を亡くした留美子の胸を刺すのではないかと思えたからだ。

「呼び出したりして、悪かったわ」

留美子は靴から白い封筒を取り出し、健治の手に渡した。

「よかったら、開けてみて」

透明白い石が出てきた。

「多分、普通の石よ。でも、なんだか急に中村君にあげたくなつて。小さい頃、母からもらつたの。母自身が勉強のお守りとして祖母からもらつたとかで、その一つよ」

留美子は、百合の花に向かって手を合わせると立ち上がり、靴を胸に抱え、木立の奥に小走りに歩いた。木立を抜けたところが、留美子の家への近道になるらしいのだ。

健治は、留美子の背中が椎の古木の奥に消えて行くのを見送ると、学校を見下ろせる元の場所に出た。

留美子が、ときどき学校裏の木立のところに来るということを知ったことが、健治の気持を和ませた。それに、一番嬉しいことは、間違いなく同じ高校に通うことになること

いうことだ。

葉煙草の葉を両腕いっぱい抱え、畦の筵に積み上げる。筵がいっぱいになれば、しよい籠に担いで、坂道を家まで運び込む。途中で、学校裏の木立の方を見やる。ひよつとしたら、今留美子が稲荷社の境内にやって来ているかもしれない。木立と葉煙草の畑とは、百メートルと離れていない。大きな声を出せば、届いてしまう距離だ。

留美子が百合の花の前にしゃがんで手を合せているとき、セーラー服の襟元の隙間から、胸の膨らみがわずかに見えた。喉から胸の膨らみにかけての肌が、透けるほどに白く柔らかかった。

「高校生か」

後三年間は、こうして間近に留美子を感じる事が出来るのだ。健治には、進学組に入ることになった成り行きがまだ信じきれなかった。

「高校のことは、やっぱり取り止めだ」

今にも父がそう言い出すのではないかと、どこかビクビクしながら、葉煙草の葉をむしっていく。

「亘が明日戻って来るから、鶏でも潰すとするか」

県大会では、二回戦を突破したが、ベスト四にまでは進めなかったと、連絡があった。

「初めての県大会で、緒戦突破どころか、強豪の光南中学に二ゴールの差を付けて勝った。上出来だ。亘はなあ、二

試合で五得点をあげたというぞ」

父は上機嫌だった。誰彼かまわず吹聴した。一年生の亘が、総得点八点のうち、五点をあげたということに浮きたっている。朝から口笛を鳴らしながら、葉煙草の葉をバンむしっていく。

「親戚を呼んで、祝勝会じゃ」

口ぶりからすると、十二軒の親戚全部に声を掛けるらしい。その前に、色付いた葉を乾燥にまわす仕事がある。

「健治も高校に行くことにしたんだから、仕事を目いっぱいやれ」ウオツシ、という掛け声を掛け、父は健治が担ぐ二倍の大きさのしよい籠を背中にし、気合いを入れ、地下足袋の足を踏ん張り、坂道を上って行く。

「健治もなあ、どかあと足腰を鍛え、早う一人前にならんといかん」亘の話が出ると決まって、健治に「お前も、もつと根性付ける」とか、「中村の家は、全部総領のお前の肩に掛かるとるんだからな」という具合になる。

「考えてもみる。お前が生まれたのは、母さんが十九で俺が二十二だから、お前が高校を出る歳のあたりでは一家を背負う覚悟があったんだぞ」畦に向かつて勢いよく小便を飛ばしながら、後ろ向きに父が言う。

焼酎の入った父と伯父が、皿を叩きながら炭坑節を歌う。歌うというより、怒鳴る。伯父の方は節を違えずに歌

っているが、父の音程は外れっぱなしだ。

亘は、寿司と刺身を食うだけ食うと、もう用はないというふうには、あくびを連発する。

「疲れただろうねえ」

母の妹の叔母が言う、
「負けたのが、口惜しくてあんまり寝られなかったんだ」と、亘はジュースを注いでもらいながら、床柱を背にして座つた足を伸ばす。

「あと三分、しっかり守っていればよ、間違ひなく準決勝まで行けたな」

「初出場なもの、上出来だと思わない。個人の競技でなら別だけど、チーム全体のことだから」

「だけど、口惜しいもんは口惜しいよ」

亘は、出場全選手で二番目の五得点をあげたということでもダルをもらってきたが、後一試合でも出場機会があったら、一得点差を逆転できた筈だと言う。

「誰に似て、こう気が勝ってるんだろ」親戚の誰もがこう言う。親戚筋で気が強いといえは、祖母が代表格だ。

「あたしは、決して欲張りではないからね」祖母をして、そう言わせるほど、亘は真から口惜しがってみせる。

「明日から、練習再開だ。県大会の三回戦で敗退など、ちつとも嬉しくなんかないよ。目標は、全国大会だ」

ほう、と炭坑節の伯父が歌を止めて亘の顔を、しげしげと覗き込む。無精髭の伸びた伯父の顎に、寿司の飯粒がこ

びり着いている。

「長崎のやつらに、絶対勝つ。あの大応援団に一泡ふかせてやるんだ。チアガールを二十人も踊らせ、校旗をかざして応援するんだ。こちらと言えは、親や親戚とかで総勢十人だろ。これが口惜しくなくて何なんだよ」

健治には、チアガールというのが分からない。大応援団というのもよく分からない。

「島には島の流儀があるさ」と伯父。

「そうは言ってもさ、やつらは歩いて会場にやって来るんだぜ。バスで遠足みたいにぞろぞろやってくる学校もある。そいつらが、背中突き合つて騒いでる。親たちも幟を立てて、応援しとる」

「多けりやええ、というもんでもなかるう」

「少なくともいいということでもないさ。やつらがボールを持つと、全員が総立ちになる。ゴールでも決めようもんなら、競技場に地響きがする。反対に、こつちがゴールを決めると、汚い野次が飛ぶ」

「街の連中、そんなに暇なのかい」

「気合いの入れどころが違うんだ」

うむ、と父と伯父が同時に唸った。

第一回目の登校日は、朝早くからクマ蟬の合唱が鼓膜を破らんばかりに降り注いでいた。

広島原爆投下日に当たるその日は、空の青さが深かった。見上げると、体ごと吸い込まれて行くのではないかと思われるほど高く、広がっていた。畑仕事で真黒に日焼けした健治は、休みに入る前の普段の日より、一時間早めに登校した。起きる時間が休みに入って早くなっているため、自然にそうなった。久しぶりにくぐる校門には、誰の姿もなかった。校門に向かう前に稲荷社の境内に足を向けてみようとしたが、思いとどまった。

留美子の姿を木立の奥に見送って、二週間以上が経つ。その間、いつも留美子のことを考えていた。去って行くときの、留美子の細い肩を思い出した。健治の思いの中で、いく分俯き加減の肩が心なしか震えていた。

「実のお母さんがいるって、羨ましいわ」

と言った留美子の声が、忘れられなかった。

健治は、カバンに小さなメモを入れてきた。早めに登校したのは、メモを留美子の机に忍ばせるというもくろみもあつた。教室には、黴と汗の臭いが入り交じっていた。窓を開け、ツンと鼻を刺す空気を外に逃がした。

留美子の机の一番手前に、メモを置いた。

「放課後、境内にいます」

メモにはそう書いた。名前は書かなかつた。

自分の机に戻ると、教科書を出した。苦手の英語だ。授

業はないが、受験前だから、目を通す時間があれば、出来るだけ教科書を開くことにしている。受験の当落のことは心配していないが、準備に当てる時間が足りない。家では、日がある間は畑や田に出なければならぬ。

夕飯の後には一応教科書を開くのだが、十分間も字面を眺めているうちに、瞼が勝手に閉じてしまう。そのまま、教科書の上に突つ伏し、しまいには机の傍に転がった格好で朝を迎える。電灯は、親が大元の電源を切るので、なんとか眠気に勝っているときでも、十時になると暗闇になってしまう。だから、家での予習復習は殆どないに等しい。

英語の教科書を開いてはみたものの、内容がまるで頭に入っていない。同じページの同じ字面を追いかけるばかりで、気持ちには教室の入口に飛んでいる。ひよつとして、留美子が早くやって来るかもしれない。出来たら、みんなが登校してくるより先に、来てほしい。

でも、教室で二人きりになるというのも息が詰まる。多分、留美子は机の中のメモをすぐに見付けるだろう。メモが誰からのものであるかも、すぐに分かる筈だ。それより、教室にいる間は、出来れば全然気付かないふうであつてほしい。健治の方を見ずに、そつとメモを鞆に入れてほしい。

「留美子、今日は見ないな」

金太が言った。魚をいつも届けている金太が、怪訝そうに留美子の席を見た。健治は、メモが金太の手に渡るのではないかとヒヤヒヤしたが、金太は机の中までは覗かなかつた。金太が何か留美子のことを知っているのではないかと耳を立てていたが、どうやら金太も知らないらしくつた。しかし、金太が、「今朝早く、留美子の家で急病人でも出たんじゃないか。明け方、病院の車が止まっついて、人だかりがしてたもんな」と、気掛かりなことを口にした。

「とするとだ、母親が産気付いたか。いいや、産気付いたんだつたら産婆さんがやつて来るのが普通だな」

金太は、それ以上のことは知らないらしくつた。

「それはないぜ。多分留美子んち、家族で旅行に出掛けたんだ。確か、長崎だと聞いたけどな」

隆則の父が、灌漑用のボーリングをするため支所長に金策の相談に行ったところ、支所長は十日ばかり留守にするとのことだったという。

「お産だろう。母親が、長崎の実家に帰ったんじゃないか」

健治は学校が終わると、末広や秦男たちの群れを抜け、学校裏の木立に歩み入った。

二十メートルでいったん木立が切れ、広場に出る。稲荷

社の境内だ。稲荷社の奥が留美子の家への近道になっており、途中で斜めに下つたところが、健治が夜道を走らされる県道への出口で、その道は源さん屋敷に続いている。

鳥居の下の階段に腰を下ろし、ポケットからメモを取り出した。結局、留美子の手には渡らなかつた。昨夜、勇を奮って書いたこのメモが届かなかつたことは、よかつたのかもしれないと考えた。このまま手に渡っていたら、自分の言葉が留美子を深く傷付けることになつたかもしれない。金太と末広が、秋口に行われる校内地区対抗野球の話に夢中になつているとき、留美子の机の傍を通るふりをし、素早くメモを抜き取つたのだつた。

荒々しい感情のままに書いた字が、自分の裸を晒しているかのようだ。自分は、留美子に何を伝えたいのか。あのいつも下半身に沸き起こってくる熱情が、メモの奥に見え隠れしている、といつても間違ひではない。

「自分も、医学を目指してみたい」

そう伝えるつもりだつた言葉を呟いてみた。昨夜、突然身内に起こつてきた言葉だ。

「自分も、苦しむ母を何とか助けたい」

胸の内で反芻してみる。空しい絵空事だ、と思う。医学を目指すなど、これまで一度も考えたことがない。なにしろ、ほんの今、高校を受験することが決まつたばかりだ。

島で職を得るには、教員という道もあるが、医師になる

という道もあるにはある。しかし、医師の方は、生半可な学力と財力では追いつかないと聞いている。

留美子が「一度だけ挑戦してみたい」といった言葉が、胸の奥に焼き付いている。しかし、留美子には許されることとであるが、健治には見通しがない。長男が島外に出ることなど、あり得ないのだ。

昨夜、健治は板張りにまで転がり出た亘の寝顔を見ているうち、高校に入ったら、とびっきりの成績を取つてやろうと考えた。とびっきりの成績を取ることが、唯一の周囲へのアピールになるかもしれないと考えた。

先のこととは考えず、とにかくトップになる。トップになることだけが目的だ。そう考えているうち、ひよつとしたらトップになれるかもしれない。きつとされる。なれる筈だ。医学を目指すのなら、留美子も当然トップを目指す筈だ。いつも留美子のことを考えている自分が、留美子と競い合うのは当然だ。現に、今でもわずかの差で留美子に勝っているではないか、と何度も考えた。

健治は、留美子からももらった白い石を取り出した。親指ほどの大きさで、なめらかな肌一本の透明の筋が入っている。留美子の耳朶の形にも、唇の形にもそれは似ている。

健治は納屋の自分の机の引き出しの一番奥に石を置いていて、ことある毎に取り出し、眺める。そうしているう

ち、留美子にメモを書かずにはいられなくなった。メモを書く前から股間のものが疼き始めていたが、書き終える前にそれはパンツの中で爆発してしまった。

健治は、金太たちが話していた急病人のことを思い出した。朝早く村に病院の車が来るなんて、めつたにないことだ。年に一度か二度、あるだろうか。

病院のことが本当なら、誰だろう。産み月の近い母だとしたら、領けないことではない。お産が切迫したのかもれない。しかし、普通のお産だったら、村の産婆が歩いて来れば済むことだ。

幼い弟であるのかもしれない。幼い子が引き付いたり、熱を出したりすることはよくあることだ。夜通し待って、朝一番に病院に連絡したのかもしれない。

結局、留美子は登校しなかった。健治は、鳥居の下の石段に腰かけ、頬杖を付いた。学校からわずかに入ったばかりのところであるのに、しんと静まっている。日差しもまばらにしか届かない。しかし、木立の中には微かに風が通っていて、汗ばんだ肌を撫でてくれる。

健治は、ポケットから白い石を取り出した。汗を吸ったそれは、生まれたばかりの卵の白身を思わせる。留美子は、勉強のお守りだといったが、留美子自身の肌似ていると思う。つるりとした石の肌を、健治は強く握りしめ

た。

「中村君」

振り返ると留美子が立っている。シャツにストラックスという珍しい格好だ。

「どうしたの」

「父が入院したの」

「支所長さんが、なぜ」

「出掛けに玄関で転んで、足の骨を折ったの」

「それで病院の車が来ていたという訳」

「ええ、段差も何もないところで、何で転んだのか分からないの。転んだ場所が悪かったのね。ちょうど、庭石の角にくるぶしを打ち付けたいらしいの」

「病院の方は」

「今まで付き添ってたの。ギブスをして、青い顔で寝てる」

「付いてなくていいの」

「お母さんと交代よ。お産が近いお母さんも、入院を早めたの。隣の病室だから、付き添いを兼ねて」

留美子は、いつもに似ず饒舌だ。

「人って、信じられないときに病気に罹ったり、怪我をしたりするのね。玄関は濡れてもいなかったし、躓きそうな石ころ一つないのよ。亡くなった母だって、十年前には今

の家への引越し荷物を、力いっぱい運んだわ。待ちに待った新居への引越しなので、大喜びだった」

留美子の家は敷地も広く、建物も大きい。赤い煙突のある、洒落た洋風の家だ。

「父と母が、長崎や福岡の家のモデルを見て、何度も何度も図面を引き直して建てたの。棟梁の源さんに頼んで」

健治は、樋が少し外れ掛けたり、雨戸が破れ掛けたりしている我が家を思った。その離れの納屋に住む自分と、自分だけの部屋を持つ留美子との違いを考える。

「でも、母は新しい家のベッドに寝るより、病院のベッドに寝る方が二倍も長かったわ」

留美子の声が、急に沈んだ。

健治が、どうしてここにいることがわかったのかと聞くと、「中村君がいるとは、知らなかった。母のお墓に、父のことをお願いしようと思つて来たの。でも、もしかしたら来てるんじゃないかと期待してたの」と目を少し泳がせた。

健治のカバンの中には、勇を奮つて書いたメモがある。

「お母さんが聞き届けてくれるといいね」

「ありがとう」

「僕、絶対勉強頑張るよ」

ちぐはぐな言葉かもしれない、と思つた。留美子の横顔

が、心なしか少し歪んで見えた。留美子は答えず、視線の先を遠くに向けたまま、木立の奥の方にゆっくり歩み寄った。留美子の母の墓は、二十ほどの石が並ぶ中の左手にあった。みかげ石の墓石はよく拭き清められ、彫られた字も新しかった。

留美子はみかげ石を撫で、跪くと、「きつと助けてね、お母さん」と言い、目を閉じ、手を合わせた。シャツから伸びた留美子の肘は細く、木漏れ日が、肘から指先にかけて青白い光を注いでいる。

「ごめんね、中村君」留美子が引き返して来た。

「僕の方こそごめん。何だか盗み見をしているようで」「いいの。でもどうして、こんなにひどいことばかりが続くのかしらと、割り切れなくて」

鳥居の下の石段に並んで腰を下ろすと、留美子は白い顔のまま小さく首を傾げた。

「実は父のことだけど、単なる骨折だけではないんじゃないかないかというところで、しばらく検査をするの」

「検査を」

「そう、内科の方」

「転び方が悪かったという」

「というより、なぜ転んだのかという方で。実は、父はこれまで二回入院したことがあるの。一週間程度ずつの短い期間だけ。長崎、福岡への出張ということにして」

留美子は、空を見上げ、「中村君のお母さん、入院したことあつて」と言った。

「入院はしないけど、毎回今にも息が止まるのではないかと、というほど辛そうだよ」

「お母さん、きつと大丈夫よ」

ふいに、留美子の声がかすれた。健治は留美子の臉から、一筋の涙が零れ落ちるのを見た。

「留美子のところ、赤ちゃんが生まれるんじゃない」

「そう、そうなのよね」

「賑やかになるんだろう。お父さん、入院なんかしてられないよ」

「そうだったわ」留美子は、二度、三度頷き、目と鼻にハシカチを当てると、健治の方に向き直った。

「中村君、私のこと嫌い」

嫌いな訳などないと言いかけた健治の言葉を持たずに、

「私、中村君が思っているほど、綺麗ではないの」と言い、涙に濡れた頬を健治の肩に寄せ、白い腕を伸ばしてきた。

シャツのボタンの隙間が開き加減になり、丸い膨らみが見え、すぐそこに見えた。留美子の唇が震えていた。

健治は留美子の肩を引き寄せ、震えている留美子の唇を自分の胸に包み込んだ。胸の膨らみも一緒に強く引き寄せた。

目を閉じた留美子の唇を、自分の震える歯で軽く噛んだ。

ふいに泣き出したのではないかという声をあげ、留美子がお近く体を寄せてきたので、唇を歯形がつくかもしれないというほどに強く噛んだ。

留美子の目から、涙が溢れ零れた。

健治も震えながら、大きく息を吐いた。

何も言えないまま、甘酸っぱい石鹼の匂いのする髪に顔を埋め、震えている留美子を、自分の震える胸に受け止めていたが、自分の息の方が苦しくなってきた。

留美子の白い胸が、何度も大きく膨らんだり縮んだりした。その膨らみを指先に熱く感じたとき、肩口を木漏れ日に向け抱き上げ、唇に歯を強く押し当てて噛み音をたてた。

健治の息が荒くなり、留美子の息も荒くなった。

健治は、葉煙草の茎を力まかせに引つ張る。葉を落とすと棒状になった茎を、まだ青いうちに抜き去るのだ。

日が昇るとともに始めたのに、なかなかはかどらない。行く手に、いったい幾十の畝が待ち構えているのか。

「力などいらんのさ、ほれ」父は、片手でスツと引き抜くと、ポンポンと茎を放っていく。

「ほんのちよつと斜めに傾け、そこを軽く引く。簡単だ

ろ、ほうら」しんせいを銜えた父は「この瞬間が最高さ。雨が降ろうと、風が吹こうと、何も気遣いはいらん」と鼻歌混じりで、機嫌がよい。今年はかなりよい葉が収穫出来たので、満足なのだ。梅雨どきの葉腐れ病にも罹らなかつたし、台風にも遭わなかつた。

「高校にまで行こうという奴が、しゃんと気合入れんかい」

父の背中汗で濡れ通っている。昨夜は、最後の乾燥が終わったので伯父たちと打ち上げになり、ビールと焼酎をしたたか飲んだ。朝一時間ばかり寝過ごしたと言いながら、髭面を綻ばせ、起きてきた。母が三日前から臥せっているのにも、文句を言わなかつた。

昨日健治は、初めて指に触れた留美子の肌の、熱く、柔らかだったことを思い、あれは夢だったのではないかと何度も考えた。あんなことが自分の身に起きる筈がないではないかと、その度に頭を振ってみた。

留美子はずっと涙を流し、泣いていた。

二人が体を離すと、留美子は下を向いたままで、シャツを直し、はだけた肌を手早く覆った。

目を合わせないまま健治と並んで歩き、分かれ道に来てもまだ涙声で「勉強、しっかり頑張つてね」と言い、木立の奥に去って行った。

健治は、帰宅後、昨夜も一人で蝮の棲む草道を跳ね、県

道の雑木のトンネルを走った。稲荷社の下を、源さん屋敷の横を、息急ぎ切つて走った。ただ、稲荷社の下を通るときは、ずいぶん気持ちに余裕をもつて走ることが出来た。初めて留美子の肌に触れた場所であつたからだつた。

それでも、真夜中の一人というものは決して気持ちいいものではない。真夜中には、何か得体の知れないものが蠢いている。健治はそう信じている。

「今日は明るいうちに作業は止めにする。たまには、休憩を入れんとな」父はしんせいをポイと投げ、地下足袋で踏みにじつた。

学校のグラウンドに来てみると、サッカーをやっている組と、ソフトボールをやっている組がいる。

「健治、どうした、暇なんか」外野の守備についていた末広がが、球を追つてやつて来た。「よっしゃ、お前も守備に付け」末広がはタイムをかけ、ベンチからグローブを借りて来てくれた。健治は、センターとライトの間に位置取り、いきなり飛んできたホームラン性の当たりを、地上寸前のところでキャッチした。

「チキショー」金太がバットを叩き付けた。抜けていれば、走者一掃の逆転の長打になるところだつた。

「やるじゃねえか」ピッチャーの泰男が、健治に駆け寄つて背中を叩いた。勝利投手の権利をもつたまま、最終回の

攻撃に入ることが出来たのだ。ピンチを凌いだチームは、末広ががタイムリー一塁打を打ち、泰男が内野安打で続いた。

健治は、ワンアウト一、三塁の場面で打席に立った。腕力には自信がある。金太の飛球を、フラインプレーで仕留めた余裕もあつた。高めの球を軽く振り抜くと、あつという間にセンターの頭を越えて行つた。

「まぐれ当たりのくせ、よう飛ぶな」末広がの癖のある褒め言葉には慣れている。

反対側のグラウンドでは、亘がドリブルで三人をかわし、角度のいいシュートを放つたが、キーパーの攻守に阻まれ点にならなかつた。勢い余つて自分の方がゴールポストに転がり込んだ亘は、頭を抱え口惜しがっている。

「お前知つとるのかあ。留美子、転校するとうぞ」末広がが言う。

「二、三日うちに長崎だそうだ。親父さんの検査と、母親も産み月だからな。入院先を、母親の実家のある長崎に移すとのことで、留美子もついていかならん」

「中学生の娘一人残すわけにもいかんからな」金太が、流れる汗を拭いもせずに言う。プレーの口惜しさは、もう忘れたらしい。金太は、留美子の家の玄関が開ざされた様を見、村人の口にのぼる噂を聞いてきたと言つた。

「今、突然決めたということではなさそうだ。親類が何度も寄り合い、話し合ったらしい」

健治は、留美子を包む空気がのつびきならぬものであるということ、今初めて知った。

「勉強、しつかり頑張ってね」

そう言つて鳥居下を留美子が去るとき、転校のことはもう決まっていたのだったろうか。

健治は、いつも持ち歩いているポケットの中の白い石を、渾身の力を込め握りしめた。

玄関を開けると、父の笑い声と、亘の「冗談じゃないよ。来年は絶対、全国大会に出てやる。長崎の連中を見返してやるんだ」という大声が耳を弾いた。

父はかなり出来あがつているらしく、板敷にあぐらをかき、箸で皿を叩いている。いつもの炭坑節だ。かなり音程があやしい。亘は、ひっくりかえつて漫画を読んでいる。

「健治、帰ってきたの」床の中から、母の声がした。

「済まないけど、水差しに水をもらえない」

健治は、枕元から空になった水差しを取り、目脂を浮かせた母に、「大丈夫か」と聞いた。

(了)